新編國文典

全

教科書文庫
4
815
41-1930
2000030335

41834
教科書文庫
4
815
41-1930
2000030335

教科書文庫
4
815
41-1930
2000030335

昭和五年十月十日
文部省檢定濟
師範學校並中學校國語科用

新編國文典 全

廣島高等師範學校
附屬中學校
國語漢文研究會著

東京・大阪
京極書店藏版

広島大学図書
2000030335

375.9
Hi 18

廣島大學圖書之印

広島大学 教 30335 図書

例言

一　本書は中等學校の文法科の教科書として編纂したものである。

一　理論よりも實際を重んずるが故に、例文によつて歸納的に了解しうるやうにつとめ、煩雜な說明は之を避け、且つ練習題を特に多くした。

一　練習題は特に意を用ひ、平易を旨とし、大部分尋常小學國語讀本中から之を採り、補ふに中學校一二年の讀本中のものを以てした

一　文語文法を基礎として口語文法を說くのがすべての點に於て便利であるから、動詞・形容詞・助動詞・助詞の如き先づ文語文法を說き口語文法を之に併せ說くことにした。

一　品詞の概念を與へた後、主要な品詞の詳說をし、進んで文章の構成に及ぶのが自然であると信ずるが故に今はそれによつた。

一　動詞は六つの活用形を知つた後、其の活用の種類を說くのが便宜であるからそれに從つた。

一　動詞と助動詞との接續は動詞の活用形による分類よりは、助動詞の種類を擧げた後、其の種類の一々に對して接續の法を說くのがよいと信ずるが故に、活用形による分類法は之を生徒各自の練習題とした。

一　品詞の轉成文の性質上の分類は必要に應じて說明を加へておいたから、特に一項を設けなかつた。

昭和四年十月

著者識

新編國文典　目次

總說……一
單語篇（上）
第一章　名詞……二
第二章　代名詞……六
第三章　動詞……九
第四章　形容詞……一二
第五章　副詞……一四
第六章　助動詞……一八
第七章　接續詞……三

第八章　感動詞……三五
第九章　助詞……一七

單語篇（下）

第一章　文語動詞の活用形……三〇
第二章　文語動詞の活用の種類……三五
一　四段活用……三五
二　上二段活用……三六
三　上一段活用……三六
四　下二段活用……三七
五　下一段活用……三八
六　カ行變格活用……三八
七　サ行變格活用……三九
八　ナ行變格活用……四〇

九　ラ行變格活用……四一
第三章　文語動詞の識別法……四二
一　活用の種類を識別する法……四二
二　活用の假名遣を識別する法……四三
第四章　口語動詞の活用……四八
第五章　形容詞の活用附形容動詞……五二
文語形容詞……五二
口語形容詞……五四
形容動詞……五五
第六章　音便……五七
動詞の音便……五七
形容詞の音便……六〇
第七章　文語助動詞の種類及び活用……六三

一　時の助動詞……六三
二　受身の助動詞……六五
三　可能の助動詞……六六
四　使役の助動詞……六七
五　崇敬の助動詞……六七
六　推量の助動詞……六八
七　打消の助動詞……七〇
八　指定の助動詞……七一
九　咏嘆の助動詞……七三
一〇　願望の助動詞……七三
一一　比況の助動詞……七三
第八章　口語助動詞の種類及び活用……七五
一　時の助動詞……七五
二　受身の助動詞……七七

三　可能の助動詞……七七
四　使役の助動詞……七七
五　崇敬の助動詞……七八
六　推量の助動詞……七九
七　打消の助動詞……七九
八　指定の助動詞……八〇
九　願望の助動詞……八一
一〇　比況の助動詞……八一
第九章　動詞と助動詞との接續……八三
第一〇章　助動詞相互の接續……八九
第一一章　助詞の用法附係結の法則……九四
一　ば……九四
二　と　も……九五

三　ど・ども……九七
四　な……九八
五　な……そ……九八
六　と……九九
七　だに・すら・さへ……一〇〇
八　ばや・なむ……一〇一
九　や・か……一〇一
係結の法則……一〇三
第一二章　接頭語・接尾語……一〇八

文章篇

第一章　文の成分……一一〇
主語・述語……一一〇

客語……一一一
修飾語……一一三
獨立語……一一四
第二章　文の成分の位置及び省略……一一六
正常の場合……一一六
倒置の場合……一一七
省略の場合……一一八
第三章　文の種類……一二一
單文……一二一
復文……一二三
重文……一二三
附錄　文法上許容ニ關スル事項……一二三
表

一　文語動詞活用表
二　口語動詞活用表
三　文語形容詞活用表
四　口語形容詞活用表
五　文語助動詞活用表
六　口語助動詞活用表

東京大學圖書之印

文

單語

品詞

總說

我々朝食を食ひたい

新編國文典

總說

世の出來事を速に知らんとするは人情の常なり。右の例のやうに、一のまとまつた思想をあらはしたものを**文**といふ。

然して文は、これを分解する時は、右の傍線を施した部分のやうに、それ〴〵一の意味又は働きをもつた單位に分れる。かゝる言語の一單位を**單語**又は**語**といふ。

單語を其の意味・働き・形等の上から左の九種に分ち、その各〻を**品

詞といふ。

名詞　代名詞　動詞　形容詞　副詞　助動詞　接續詞
感動詞　助詞

單語篇（上）

第一章　名詞

一　次郎は太郎の弟である。

二　物の價の高下は、主として需要と供給との關係によるなり。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の名稱をいふ語である。かゝる語を名詞といふ。

名詞

名詞中、左の例のやうに、事物の數量又は順序をあらはす語は、特に數詞と呼ぶことがある。

一　四と五との和は九である。

二　鉛筆一ダースの價三十錢なり。

三　彼は級中第一番の秀才である。

數詞

練習

次の文中から名詞を選び出せ。

(1) 麓の川を白帆が通つてゆく。

(2) 支那の國花は牡丹である。

(3) 我が國の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。

(4) 私は名を太郎と申しまして、今中學校の二年生であります。

(5) 藍・白・赤三色を以て染分けられたるは、フランスの國旗なり。

動詞

(6) 怒と失望と後悔とに身も魂もくだけ果てた王は、我にもあらず荒野の末をさまよひ出た。

(7) たとへ十分十五分の餘暇でも無益に費すことはなかつた。

(8) 杉は需要の多きこと我が國木材中第一位にあり。

(9) 調子のよい蜜柑採歌がすみきつた晩秋の空氣をふるはして、何處からともなく、のどかに聞えて來る。

(10) 松江を發したる汽車は風光繪の如き宍道湖畔を走れり。

(11) 東大寺の金堂は天空高く聳えて、五丈三尺の大佛千二百年の面影を殘せり。

(12) 母の脊から小さな手をのばして、空のお月さまが手にとれると信じきるのは子供である。

(13) 一番目の弟は十歳で、二番目のは五歳である。

(14) 十で神童、十五で才子、二十すぎてはたゞの人。

(15) 間宮林藏は幕府の命によつて松田傳十郎と共に樺太の海岸を探檢せり。

(16) エヂソンの發明せるは、電話、電燈、電信、電車、活動寫眞、蓄音機に關するもの極めて多し。

(17) 忠孝は我が國民性の根本をなすもので、之に附隨して多くの良性美德が發達した。

(18) 杉の梢で小鳥が一羽啼いてゐる。

(19) マツチはちよつとした物で、價も安く、一包十箱が十錢くらゐで買はれる。しかし之を一人で造るとして、こんなに安く賣れるであらうか。たとひ休まず働いても、一人で一日に一包は造れまい。かりに造れたとしてもそれを十錢ぐらゐで賣つては損になる。

(20) 驚くべきは輪轉機の能力なり。卷取紙とて幅三尺六寸、長さ一萬六千尺餘りのものを之に取りつくれば、機械は電力によりて働き、印刷も切斷も人手を要せず、一臺よく一分間に四百五十枚の新聞紙を印刷すといふ。

代名詞
人代名詞
指示代名詞

第二章　代名詞

一　君は彼と親友なのか。

二　これは誰の書物でせう。

三　それをあちらの机の上に置いて下さい。

右の例に於て、傍線を施した語は、名詞の代りに用ひられた語である。かゝる語を**代名詞**といふ。

代名詞中、人の名の代りに用ひられるものを**人代名詞**といひ、事物・場所・方向をあらはすものを**指示代名詞**といふ。

人代名詞の例　我　私　僕　汝　君　あなた　彼　あれ　あの方　誰　どなた

指示代名詞の例　これ　それ　あれ　どれ　こゝ　そこ　あそこ　どこ　こちら　そちら　あちら　どちら

體言

名詞・代名詞を**體言**といふ。

練習

一、次の文中から代名詞を選び出し、且つ其の種類をいへ。

(1) これは私の本ですが、あれはあなたのでせう。

(2) あなたもずゐぶん大きくなりましたね。お父さんの若い時そつくりです。

(3) 私が今度歸つて來て、青年團の規約を見た時、其の整つてゐるのに驚いた。

(4) それなるは佐野源左衞門常世か。これは何時ぞやの大雪に宿を借りた旅僧である。

(5) 此の袋で蟲を採るのだ。中をのぞいてみよ。何か入つてゐるやうだから。

(6) どれを見ても枝といふ枝にはもう黄金色の實がなつてゐる。
(7) どの山を見てもどの谷を見ても、蜜柑の木でない處はない。
(8) あちらでもこちらでも、さえた鋏の音がちよきん〳〵と聞える。
(9) 一體あなたはどなたですか。どうも私はお見受けした事がない樣ですが。
(10) 竹村がくれ夕餉たく煙ぞなびくこゝかしこ。
(11) 「あゝ、あれは僕の作つた曲だ。君聽き給へ。なか〳〵うまいではないか。」
(12) 僕足下の言を用ひず自ら求めて此の失敗に陷る。あゝ、誰をか恨み何をか咎めん。
(13) 日が暮れた。いつとともなく淋しい野寺の鐘が聞える。
(14) 彼方此方殘るくまなく探し求めしが、わが友はあらざりき。
(15) そのうち誰いふとなく、あれは山師坊主で、あのやうなまねをして、人をろらくするのであらうといふはさが立つた。

二、右のほか代名詞を知つてゐるだけ擧げよ。

第三章　動詞

一　孔子は、少時より學問に勵み、長じて後、魯の君に仕へ、大に治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ることあたはずして魯を去りぬ。

二　瀬戸内海には、到る處に岬あり、灣あり。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の動作又は存在をあらはす語である。かゝる語を**動詞**といふ。

練習

次の文中から動詞を選び出せ。

(1) 沖を走るは丸屋の船か、丸にやの字の帆が見える。

(2) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。
(3) 病は口より入り、禍は口より出づ。
(4) 忠言は耳に逆へども行に利あり。
(5) 僕は毎日炭を燒く煙を遠くに見てゐるが、まだ一度も其處へ行つて見たことがない。
(6) 咲く花のにほふが如しと謳りし奈良の都も、色移り香失せて年既に久し。
(7) 彼は勝つてかぶとの緒をしめざりし油斷を悔いつゝ、俄に暗の中を退却したり。
(8) 刈る、切る、掘る、運ぶ、誰も彼も一心不亂に働くので、仕事は豫想以上にはかどつた。
(9) 彼は父の寫眞を、死ぬる際まで、肌身離さず持ち居たり。
(10) 宣長は絶えず文通して眞淵の敎を受け、師弟の關係は日一日と親密の度を加へたが、面會の機會は松坂の一夜以後とう〳〵來なかつた。

第四章　形容詞

一　高き山北に聳え、清き河南に流る。
二　煙たなびくとまやこそ、我がなつかしき住家なれ。
三　鶯は形はみにくいが、聲は美しい。

右の例に於て、傍線を施した語は、事物の性質又は狀態をあらはしてゐる。事物の性質又は狀態をあらはす語は他にもあるが、其の中で左の例のやうに、いひ切る場合に、文語ならばし、口語ならばい又はしいとなるものを**形容詞**といふ。

文語	口語
長し	長い
短し	短い

悲し　　悲しい
鬱陶し　　鬱陶しい

動詞・形容詞を用言といふ。

命令ナシ

用言

練習

次の文中から形容詞を選び出せ。

(1) 赤い花が一面に咲いて誠に美しい。
(2) パナマ地峽は一體に小さい山が起伏してゐる上に、地層には堅い岩石が多い。
(3) 駒とめて袖打拂ふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮。
(4) うるはしい眞玉白玉、香よき木の實草の實、うづだかき積荷の中に、海山の寶を載せて、船は今靜かに歸る、懷かしき故郷の港。
(5) 死は鴻毛より輕く、義は泰山より重し。

(6) 櫻は空靑く水淸い日本の景色には最もよく釣合つて、深山都市どこにあつても皆よろしい。
(7) 妻は急ぎて夫の室に入り、氣づかはしき瞳を病の床に注ぎぬ。あはれ、妻は何をか見し、最後の息は此の時絕えて冷たき唇は見る〳〵色を變じゆけるなり。
(8) 近き船は行けども遠き帆影は動かんともせず。
(9) 悔しいのか、嬉しいのか、哀しいのか、恥づかしいのか、辛いのか、恐らく其のすべてであらう。だしぬけに涙がほろりと落ちたと思ふと、僕はすゝりなきに泣出した。
(10) 遠くの森で啼くかな〳〵〳〵といふひぐらし蟬の、あの澄みきつて淋しい聲を聽くと、何といふことなしに淡い哀愁が胸に湧いて、心がおのづと靜かになる。此の蟬の聲が聞え始めると、暑さがどんなにはげしくても妙に秋らしい氣がする。

第五章　副詞

一　島がかすかに見える。
二　道きはめて險し。
三　非常に美しい森の中を、大きな河がゆるやかに流れてゐる。

右の例に於て、かすかに・ゆるやかには見える・流れといふ動詞の意味を修飾し、きはめて・非常には險し・美しいといふ形容詞の意味を修飾してゐる。かゝる語を**副詞**といふ。

一　此の犬は、いと速に走る。
二　彼はやゝ暫く考へ居たり。

右の例のやうに、副詞は又他の副詞の意味を修飾することもあ

動詞と形容詞を修飾す

る。

かやうに副詞は、動詞・形容詞、又は他の副詞の意味を修飾するものである。

練習

次の文中から副詞を選び出し、どの語を修飾してゐるかをいへ。

(1) さながら別天地に遊ぶ思あり。
(2) 感慨に打沈みてとぼ〳〵と歩を運ぶ。
(3) 彼は極めて丁寧に挨拶した。
(4) 茶煙絶え〴〵に揚がりて花極めて白し。
(5) 文天祥曰く「我は宋の臣なり。いづくんぞ二朝に仕へんや。」
(6) われ豈之を知らざらんや。
(7) 決して他人にはたよるまい。自分一人で修行をしよう。

たった一星ノ道

(8) 昨日のボートレースには僅かに半艇身の差で敗けた。實に殘念だつた。

(9) りん〳〵といふ冴えた音が遙か山裾からこの山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。

(10) 此の境内には立木極めて少なかりしかば、新に植込みたる木の數實に十數萬本に及べり。

(11) 程なくフイリツプは病室にはいつて來て、恭しく藥のコツプを王に捧げた。

(12) 町はづれの川で水浴をした。水は意外に冷たくて、まるで氷のやうであつた。此の水浴が體にさはつたものか、王は俄にはげしい熱病にかゝつた。

(13) 汽車はそろ〳〵動き出した。忽ちからつと明るくなつて、田圃がひろ〳〵と見渡された。

(14) すかさず鐵砲組に合圖して銃火をあびせかけたれば、敵は見る間にばたばたと倒れて、一軍今や崩れんとす。

(15) 禽獸すら恩を知る。況んや人に於てをや。

(16) 或時のことである。釋迦は夜もすがら靜坐してひたすら思をこらしてゐると、やがて一點の明星がきらめいて、夜はほの〴〵と明けそめた。其の刹那、彼は迷の雲がからりと晴れて、ぱつきりとまことの道を悟り得た。

(17) ふと目をさますと、遠くでかすかにきやん〳〵といふやうな聲がする。不思議に思つて耳をすましてゐると、次第次第に大きく高くなつて、づひにはたしかに門前に聞える。

(18) 疑もなく小狗の啼聲だ。がらりと雨戸を繰ると、さつと夜風が吹込んで、燈火がちら〳〵となびく。

(19) 恰も百雷の一時に落ちたらんが如し。

(20) すご〳〵と立去る僧の後影を見送りたる妻は、やがて夫に向ひて、「あゝ、おいたはしい姿。とても明るいうちに山本まではお着きになれますまい。お泊め申してはいかゝでございませう。」同情深き妻の言葉に、主人はいたく心動きぬ。

第六章　助動詞

一　苦心に苦心を重ねて集めたる出版費は、遂に一錢も、殘らずなりぬ。

二　改めようと思へば改められる。

右の例に於て、傍線を施した語は、動詞に添うて其の意義を助け、色々な意味をあらはしてゐる。かゝる語を**助動詞**といふ。

助動詞は主として動詞に添うて其の意義を助けるものであるが、他の品詞に添ふこともある。

名詞に添ふ場合

一　楠正成は忠臣なり。

二　これ臣子たるものの分なり。

代名詞に添ふ場合

古今第一の忠臣は彼なり。

形容詞に添ふ場合

山の高きなり。

他の助動詞に添ふ場合

一　徒に多くの時日と金錢とを費したるに過ぎざりき。

二　實に團扇に用ひられたる竹なりしなり。

かやうに助動詞は、動詞・名詞・代名詞・形容詞又は他の助動詞に添うて、その意義を助けるものである。

一　落花雪の如し。

二　其の速きこと汽車の走るが如し。

右の例のやうに、如しといふ助動詞は、の又はがを挾んで上に續

く場合が多い。

練習

一、次の文中傍線のある語はみな文語の助動詞である。その意味を口語でいへ。

(1) いづこならん笛の音聞ゆ。
(2) 乃木將軍は我が武士道の權化たり。
(3) 虫の聲繁くして雨に似たり。
(4) 袂の雪を打拂ひ〳〵此方へ來かゝれるは、此の家の主人なるべし。
(5) ゐろりの火は次第におとろへ行きて、際洩る夜風肌をさすが如し。
(6) 彼は口をつぐみて何事も言はざりけり。
(7) 夜もいと更けしかば月も入りぬ。

(8) 患者に藥を飲ます。
(9) 鳥も鳴かずば打たるまじ。
(10) 頼朝義經に義仲を攻めさす。
(11) 唯をり〳〵興味ある特殊の事件を報道するに過ぎざりき。
(12) 今や遠くヨーロッパに起りし事件も僅か一兩日にして、讀者に報道せらる。
(13) 我が日の丸の旗は皇威の發揚、國運の隆昌さながら旭日昇天の勢あるを思はしむ。
(14) 君はまだ遠くは行かじ。

二、次の文中から助動詞を選び出せ。

(1) 暦は實に重寶なものだ。こんな重寶なものがあるのに、それを利用しないでゐるのは寶の持ちぐされだ。
(2) 物すごい響は萬雷の如く、大地もふるひ、數百歩はなれた所でも、器に盛つた水が波紋をゑがく程です。

(3) 庭に敷きつめたむしろの上に、黄色い麥の穗が一面に廣げられて、まぶしいやうな夏の日にかゞやいてゐる。

(4) 下駄の音が聞える、弟が歸つたらしい。

(5) 知識を得たいといふ欲望は益〻強くなり、父に對して是非學校に入れてもらひたいと願つたが、父は許してくれなかつた。

第七章　接續詞

一　石炭・石油及び瓦斯は、現代の主なる燃料なり。

二　書を讀み、且つ字を習ふ。

三　友人達は昨日登山した。然し私は行かれなかつた。

右の例に於て、傍線を施した語は、その前後の語句又は文を接續してゐる。かゝる語を**接續詞**といふ。

練習

一、次の文中から接續詞を選び出せ。

(1) 氣候もよいし、それに交通も便利である。

(2) 自治の精神は實に自治制の根本であり、又其の生命である。

(3) 吉野に遊び、ついで高野山にのぼれり。

(4) 彼は昨日出發しただらうか、それとも延期しただらうか。

(5) 鳩に手紙を運ばせるには、足にアルミニウムかセルロイドの細いくだを附け、或は胸に袋を掛けさせて、其の中に入れるのである。

(6) 古い言葉を調べるのに一番よいのは萬葉集です。そこで先づ順序として萬葉集の研究を始めました。

(7) 新聞雜誌へも少しも書かぬ。手紙は一切廢止。それだから御無沙汰してすまぬ。

(8) 鐵眼は一切經の版行を思ひ立つと同時に、一切の衆生からその寄附を受け

ることにしよう」と思つた。で、先づ手始めに、京の粟田口に立つて往來の人に勸化をすることにした。

(9) 犬は眠れる時も人の足音を聞けば直ちに目をさます。されば夜を守らしむるによし。

(10) 僕は隨分勉强をしたよ。だが駄目だつた。もつとも其の日は身體の具合が惡かつたけれども。

(11) 樺太は大陸の地續なりや、又は離れ島なりや、世界の人は久しく之を疑問としたりき。然るに此の疑問を解決したる人、遂に我が日本人中より現れぬ。

(12) 制服制帽にて登校すべし。但し病氣の場合は此の限りにあらず。

(13) 昔太平大西兩洋の間を往來する船は、遙か南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかしパナマ運河の開通以來は此の不便がなくなり、從つて世界の航路に大きな變動を生じたのである。

(14) 鐵眼は暫く人通りの絶えた午過ぎの大通をあちこちと見廻した。すると土にまみれた水呑百姓が大きな牛を追ひながら、のそ〳〵通りかゝつて來るのが目についた。

二、次の接續詞を用ひて短文を作れ。

しかのみならず　もしくは　かくて　しかれども　ゆゑに

だが　ところが

第八章　感動詞

一　嗚呼、悲しい哉。

二　あはれ、友は此の世を去りぬ。

三　おや〳〵、これは驚いた。

右の例に於て、傍線を施した語は、感動した場合に覺えず發する語である。かゝる語を**感動詞**といふ。

注意　「あはれ悲しも。」「あな面白の樂の音や。」のあはれあなは感動詞であるが、も・や等は感動の意をあらはす助詞である。即ち、感動詞は獨立した發聲の語だけをいふのである。

練習

次の文中から感動詞を選び出せ。

(1)「あゝ、あなたはベートーベン先生ですか。」兄妹は思はず叫んだ。
(2) 兄さん、まあ、何といふよい曲でせう。私にはもうとても彈けません。
(3) よう、おかあさん行つて見よう。よう。
(4)「おや〳〵、まあ可愛らしい。」と母もいつた。
(5) あはれ太閤世を去りて、世嗣の君は幼し。
(6) いでや目にものみせん。
(7) やあ熊谷殿には好き敵と組まれしよな。
(8) さあ今の間に少しも早く。
(9) おゝ降つたは〳〵。世に榮えてゐる人が(此の雪)眺めたら、さぞ面白い事であらうが。
(10)「失禮ながらお名前を聞かせて頂きたい。」「いや、名前を申し上げる程の者ではございません。」

第九章　助詞

一　東國へ行き給ふと聞きしに、今又此處に來られしは何故ぞ。

二　期限までに提出すればよいが、萬一後れると無効になる。

右の例に於て、傍線を施した語は、種々の語に添うて他の語との關係をあらはしてゐる。かゝる語を**助詞**といふ。

練習

次の文中から助詞を選び出せ。

(1) 君が代は千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで。
(2) 嬉しいにつけ悲しいにつけて憶ひ出すのは、親のこと、それにボチのことだ。
(3) 寒くても我慢しろ。やがて火を焚いてやるからな。
(4) 頂上を仰げば山は殆ど落ちかゝらんばかりに聳え立ちて一歩は一歩より嶮なり。
(5) 市街を見物して私の特に感心したのは、市民が交通道徳を重んずることであつた。
(6) こらどうした。命が惜しくなつたか、妻子がこひしくなつたか。軍人となつていくさに出たのを男子の面目とも思はず、其の有様は何事だ。
(7) 千辛萬苦にあふとも、志を挫くべきものかは。
(8) 雨だに降らずば行くべし。

(9) 天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも。
(10) 悲しいやら淋しいやらで夜も寝られない。

次の文を品詞にわけよ。

(1) 薄志弱行の徒は生存競争の世に立つべき資格を缺くものなり。
(2) 志は大なるべし。殊に空想に耽り易き青年時代には成るべく大なる志を立つるをよしとす。
(3) 夜がほの〳〵と明けた頃荒れ狂ふ海上を見渡したグレース親子はふと遙かの沖合に、かの難破船を見とめた。
(4) 古のふみ見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと。
(5) 京鎌倉では、そろ〳〵櫻が咲かうといふ三月の初めであるのに、北風荒き北海の孤島にはちら〳〵と雪が降る。

單語篇（下）

第一章　文語動詞の活用形

書

か……ず	む	ば	
き……て	たり	始む	
く			
く……こと	人		
け……ども	ど	ば	
け			

起

き……ず	む	ば	
き……て	たり	出づ	
く			
くる……こと	人		
くれ……ども	ど	ば	
きよ			

射

い……ず	む	ば	
い……て	たり	切る	
いる			
いる……こと	人		
いれ……ども	ど	ば	
いよ			

蹴

け……ず	む	ば	
け……て	たり	始む	
ける			
ける……こと	人		
けれ……ども	ど	ば	
けよ			

棄

て……ず	む	ば	
て……て	たり	去る	
つ			
つる……こと	時		
つれ……ども	ど	ば	
てよ			

來

こ……ず	む	ば	
き……て	たり	始む	
く			
くる……こと	人		
くれ……ども	ど	ば	
こよ			

アリウエオ

佐行変格活用

（爲）

せ……ず　む　ば
し……て　たり　終る
す
する……こと　人
すれ……ども　ど　ば
せよ

良行変格活用

ら……ず　む　ば
り……て　たり　がたし
り
る……こと　人
れ……ども　ど　ば
れ

奈行変格活用

な……ず　む　ば
に……て　たり　絶ゆ
ぬ
ぬる……こと　人
ぬれ……ども　ど　ば
ね

死

活用
語根
語尾
活用形
未然形
連用形

右の例に於て見るやうに、

一　大部分の動詞には、變化する部分と變化しない部分とあ（る。

二　動詞の變化は、五十音圖の同行の間に於て起る。

三　動詞は六段に變化する。

かやうに、動詞の形の變化することを**活用**といひ、變化しない部分を**語根**、變化する部分を**語尾**といふ。又動詞の活用の六段の形を**活用形**といふ。

第一段　主として助動詞ず・む、助詞ば等に續けて動作の未だ成立つてゐない意をあらはす形であるから、**未然形**といふ。

第二段　主として用言に連る形であるから、**連用形**といふ。

一　書を讀み、字を習ふ。

中止形

名詞形

終止形

連體形

已然形

二　父は畠に出で、子は山に行く。

右の例のやうに、連用形は、文意を中止して下に續ける爲に用ひられる形であるから、**中止形**ともいふ。

鉛筆けづり　紙ばさみ　山登り

連用形は又右の例のやうに、轉じて名詞となる形であるから、**名詞形**ともいふ。

第三段　主として文意を終止する爲に用ひられる形であるから、**終止形**といふ。

第四段　主として體言に連る形であるから、**連體形**といふ。

第五段　主として助詞ども・ど・ば等に續けて、動作の已に成立つてゐる意をあらはす形であるから、**已然形**といふ。

命令形

第六段　專ら命令の意をあらはす爲に用ひられる形であるから、**命令形**といふ。

練習

次の語を活用させよ。

叫ぶ　閉づ　釣る　得　着る　恥づ　流る　煮る　有り　來る

來　爲　積む　死ぬ　報ゆ　用ふ　居る　居る　蹴る　告ぐ

第二章　文語動詞の活用の種類

一　四段活用

活用＼語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
書	か	き	く	く	け	け
破	ら	り	る	る	れ	れ

右の例のやうに五十音圖の**ア**列・**イ**列・**ウ**列・**エ**列に活用するものを四段活用といふ。

四段活用の動詞は五十音圖の**カ**(ガ)・**サ**・**タ**・**ハ**(バ)・**マ**・**ラ**の行にある。

二　上二段活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
起	き	き	く	くる	くれ	きよ
老	い	い	ゆ	ゆる	ゆれ	いよ

右の例のやうに五十音圖の**イ**列・**ウ**列に活用し、連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふものを上二段活用といふ。

上二段活用の動詞は五十音圖の**カ**(ガ)・**タ**(ダ)・**ハ**(バ)・**マ**・**ヤ**・**ラ**の行にある。

三　上一段活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(射)	い	い	いる	いる	いれ	いよ
(干)	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひよ

右の例のやうに五十音圖の**イ**列にのみ活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添ふものを上一段活用といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖の**ア**・**カ**・**ナ**・**ハ**・**マ**・**ワ**の行にある。

四　下二段活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(得)	え	え	う	うる	うれ	えよ
聞	え	え	ゆ	ゆる	ゆれ	えよ

右の例のやうに五十音圖の**ウ**列・**エ**列に活用し、連體形にる、已然

下二段活用

形にれ、命令形によが添ふものを下二段活用といふ。

下二段活用の動詞は五十音圖の各行にある。

五　下一段活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	けよ

下一段活用

右の語は、五十音圖のエ列に活用し、終止形と連體形にる、已然形にれ、命令形によが添うてある。この活用を下一段活用といふ。

下一段活用の動詞は、蹴るといふ一語のみである。

正格活用

以上五種の活用を正格活用といふ。

六　カ行變格活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(來)	こ	き	く	くる	くれ	こよ

カ行變格活用

右の語はこ・き・く・くる・くれ・こよと活用する。この活用をカ行變格活用といふ。

カ行變格活用の動詞は來といふ一語のみである。

七　サ行變格活用

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
(爲)	せ	し	す	する	すれ	せよ

サ行變格活用

右の語はせ・し・す・する・すれ・せよと活用する。この活用をサ行變格活用といふ。

サ行變格活用の動詞は、元來すといふ一語のみであるが、他の語にすが添うて、多くのサ行變格活用の動詞を作る。

例へば

勉強す　登山す　悲觀す

罰す　達す　渇す　發す
報ず　講ず　應ず　投ず
論ず　觀ず　歎ず　難ず
旅す（タビ）　罪す（ツミ）　ものす
全うす　辱うす　空しうす
重んず　輕んず　先んず

八　ナ行變格活用

活用＼語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
往（イ）	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

右の語は、**な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ね**と活用する。この活用をナ行變格活用といふ。

ナ行變格活用の動詞は死ぬ・往ぬといふ二語のみである。

九　ラ行變格活用

活用＼語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
有	ら	り	り	る	れ	れ

右の語は、**ら・り・り・る・れ・れ**と活用する。この活用をラ行變格活用といふ。

ラ行變格活用の動詞は、有りの外居り・侍りといふ二語があるが、今はあまり用ひられない。

以上四種の活用を**變格活用**といふ。

文語動詞の活用には以上九種ある。

ナ行變格活用

ラ行變格活用

變格活用

第三章　文語動詞の識別法

一　活用の種類を識別する法

語數が少なくて、暗記するとよいもの

上一段　射る　鑄る　居る　著る　似る　煮る　干る
　　率ゐる　見る　（顧みる・惟みる・鑑る・試みる）

下一段　蹴る

カ變　く（來）

サ變　す（爲）　他語にすの添うたもの

ナ變　死ぬ　往ぬ

ラ變　有り（居り）　（侍り）

右の外は

四段　打消のずがア列の音に添ふ。……下二段

上二段　打消のずがイ列の音に添ふ。

下二段　打消のずがエ列の音に添ふ。

二　活用の假名遣を識別する法

（イ）ア行・ハ行・ヤ行・ワ行の識別法

ア行　得……下二段

ワ行　植う　飢う　据う……下二段
　　居る　率ゐる……上一段

ヤ行　老ゆ　悔ゆ　報（酬）ゆ……上二段
　　癒ゆ　怯ゆ　覺ゆ　おもほゆ
　　消ゆ　聞ゆ　越ゆ　肥ゆ　凍ゆ

冴ゆ　榮ゆ　戯ゆ（又はそばふ）　聳ゆ
絶ゆ　費ゆ　潰ゆ　痿ゆ　煮ゆ
生ゆ　映ゆ　冷ゆ　殖ゆ　吼ゆ
見ゆ　見ゆ　燃ゆ　萠ゆ　悶ゆ
……下二段

右の外は、すべてハ行活用である。

（ロ）ザ行・ダ行の識別法

ザ行　1　混ず……下二段
　　2　他語にすのつきたるサ變の動詞中の講ず・應ず・論ず・變ず・重んず等の類

右の外は、すべてダ行である。

練習

一、次の文中から動詞を選び出し、且つ其の活用の種類をいへ。

(1) 泉州某寺に、或畫師寄食してありけるが、何一つ畫くこともなく、毎日遊び暮して既に數年を經たり。

(2) 風は少しも其の力を緩めず、敵の警戒は益〻嚴を加へつ。

(3) 船の周圍に彈丸落下して、水煙を立て時に全く船影を蔽ふことあり。

(4) 朝疾く起きて稲田のあたりをさまよへば、涼しき風身にしみて、心も自ら清まりぬ。

(5) 今日はじめて蜩の聲を後山に聞きぬ。一聲さわやかにして銀鈴を振れるが如し。

(6) 畫師は前の如く夜もすがら寢ねずして、明日はかく畫がかんなど獨言してゐたり。

(7) 春は來ぬ。越路の雪も解始めたれば、柴田勝家先づ佐久間盛政をして一萬五千の兵を率ゐ、近江の柳瀨に討つて出でしむ。

(8) 奈良は一木一草に至るまでも歷史あり古歌あり、人をして低回去る能はざらしむ。

(9) 愛すべく美しき山野は、更に太古以來の歷史と結び、文學と結びて、感いよいよ深きを覺ゆ。

(10) エヂソンは例の如く實驗室に閉ぢこもりて研究に餘念なかりしが、ふと見れば机上に形珍しき一本の團扇あり。何心なく手に取りて眺めゐたりし彼の眼は異樣に輝きぬ。

(11) 英雄豪傑の士、その才常人に越えたるは、天稟に出でたる所もあるべけれど、皆幾多の辛苦をなめ、幾多の勉强を積みて始めて然りしものなり。

二、次の語を活用の種類に分類して活用表をつくれ。

報ゆ　押す　生く　鑄る　受く　往ぬ　居る　去る　蹴る　來

歷旅行す

三、次の文の誤を正せ。

(1) 仰せのまゝにたてまつり給へ。

(2) 鷹は飢ゆとも穗はつまず。

(3) 敎ゆるは學ぶの半ばなり。

(4) 入るをはかりて出ずるを制す。

(5) 彼の誠に感ずる者多かりき。

(6) 汝我が言を用ゆざれば、後に悔うることあらん。

(7) 人を射ずんと欲せば、先づ其の馬を射れ。

(8) 汝自らなし得ざることは之を人に强ゆべからず。

(9) 田を植ゑる女の歌遙に聞ゆ。

(10) 彼の率ゐる一隊は全滅せり。

第四章　口語動詞の活用

死

な……ない
に……ます
ぬ
ぬ……人
ね……ば
ね

有

ら……う
り……ます
る
る……人
れ……ば
れ

起

き……ない
き……ます
きる
きる……時
きれ……ば
きよ(ろ)

棄

て……ない
て……ます
てる
てる……時
てれ……ば
てよ(ろ)

右の例のやうに、文語のナ變・ラ變は、口語では四段となる。

(來)

こ……ない
き……ます
くる
くる……人
くれ……ば
こい

(爲)

せ……ぬ
し……ない
し……ます
する
する……人
すれ……ば
せよ
しろ

右の例のやうに、文語の上二段は口語では上一段、文語の下二段は口語では下一段となる。

右の例のやうに、カ變・サ變は文語と口語とでは形が異なる。其他、文語の四段・上一段・下一段は口語に於ても同じである。即ち、口語動詞の活用は左の五種となる。

四段活用……文語の四段・ナ變・ラ變
上一段活用……文語の上二段・上一段
下一段活用……文語の下二段・下一段
カ行變格活用……終止形が文語と異なる。
サ行變格活用……終止形が文語と異なる外、地方により、未然形・命令形も異なる。

練習

一、次の文中から動詞を選び出し、且つ其の活用の種類をいへ。

(1) 約束は守らねばならぬ、他人に害を加へてはならぬなどといふことは、我々が十分心得てゐることである。

(2) 裁判の目的は決して人を爭はせ、又は人を罰することではない。

(3) 札幌へ來て先づ感ずることは、街路が眞直で幅の非常に廣いことである。

(4) 「人は火を用ひる動物」といはれてゐるやうに、火を使用するのは人類ばかりで、他の動物には見られない所である。

(5) 東の空が明るくなると、今まで軍港の闇に包まれてゐた軍艦の壯大な姿が、だん〳〵にあらはれて來る。

(6) 鷄が麥のこぼれたのを食ひに來ては、追はれて逃げて行く。

(7) ひぐらし蟬の聲が聞え始めると、暑さがどんなにはげしくても、妙に秋らしい氣がする。

(8) 生れて始めて兩親の傍を離れたので、私は明けても暮れても故郷の空を眺めてゐた。

(9) 偉人が天下に名をなしたのは、すべて非常な苦心と努力とを費した結果である。

(10) 假に兎が一匹ゐるのを、犬が二匹で見付けたとしたならば、先に兎を捕へた

犬だけは飽食し、後れた方は餓ゑねばならぬわけゆゑ、如何なる動物も食ふための競爭は免れぬ。

二、次の文の誤を正せ。

(1) 急に天が曇つて來て星影一つさへ見へない。

(2) 月霜の如く冴へ、風海の如く吼へる夜は、物音がすべて絶へて、直に神に接するの思がある。

(3) 命を捨てて皇恩に報ゐ奉らう。

(4) 私も隨分老ひたが、しかしこのまゝで朽ちはてようとも思わない。

(5) 問ふことを恥ぢるものは立派な人にはなれない。

三、動詞の文語口語の活用の比較表を作れ。

第五章　形容詞の活用附形容動詞

文語形容詞

高

く……ば	とも
く……て	聳ゆ
し	
き……こと	山
けれ……ども	ば

美

しく……ば	とも
しく……て	咲く
し	
しき……こと	花
しけれ……ども	ば

右の例に於て見るやうに、形容詞は

一　カ行・サ行の兩行に跨つて活用する。

二　命令形はない。

三　左の二通りの活用がある。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然
高	く	く	し	き	けれ
美	しく	しく	し	しき	しけれ

ク活用
シク活用

前者を**ク活用**といひ、後者を**シク活用**といふ。

口語形容詞

高
く……ば
く(う)……聳ゆるございます
い
い……こと　山
けれ……ば

美
しく……ば
しく(う)…咲くございます
しい
しい……こと　花
しけれ……ば

右の例に於て見るやうに、口語形容詞の活用は左の如くなる。

◎

種類／活用	未然	連用	終止	連體	已然
ク活用 高	(く)	く(う)	い	い	けれ
シク活用 美	(しく)	しく(う)	しい	しい	しけれ

仮定

副詞形

名詞形

形容詞の連用形は、副詞の用をなす場合が多いので、これを**副詞形**ともいふ。

一　水清く流る。
二　花があはたゞしく散つてしまつた。

形容動詞

一　烈しかりの約つたもの。
二　堂々たりの約つたもの。
三　明瞭なりの約つたもの。

右のやうに、形容詞又は副詞に動詞ありが添うて、その形の約つたものがある。意味は形容詞と同じく性質又は狀態をあらはすものであるが、形は動詞と同じであるから、これを**形容動詞**といふ。

形容動詞はラ變の動詞と見なす。

練習

一、次の文中から形容詞及び形容動詞を選び出し、且つ形容詞は其の活用の種類をいへ。

(1) 多くの動物を注意して見ると、いろ〳〵珍しい事があるのに氣がつく。中でも面白いのは、或動物の體色がまはりの物の色に似てゐることがある。

(2) 昨日は美しき繪お送り下され誠に有難く存じ候。

(3) 松青く樓門赤く、茶煙絶え〴〵にあがりて、花極めて白し。

(4) だら〳〵坂を登りきると、道は低い峯傳ひになる。何時もは薄暗い程茂り合つてゐる兩側の木立も、まだ若葉だけに、下草まで見えるぐらゐ明るい。

(5) 面白き案多かれどそのまゝ中絶したり。

(6) 枇杷はうまけれど種子大きく肉少なきは飽かぬ心地す。

(7) 寶玉をちりばめたやうなかはいゝ目、紅をさしたかと思はれるやさしいくちばし、美しい羽毛に包まれた圓い胸、鳩は見るからに愛らしいものである。

(8) 朝夕は凌ぎやすけれど日中は堪へ難し。

(9) 大なる志氣を養はんには都をはなれたること遠く、山高く、水長く、萬境自然なる處に於て、清淨なる空氣を呼吸せざるべからず。

(10) 私は富士登山は隨分苦しからうと思つたが、實際登つてみたら大へん面白かつた。

二、次の形容詞を活用させよ。

なし　勇しい（けや）　辱い　するどし　羨し　樂し

第六章　音　便

動詞の音便

動詞の連用形から、て(で)・た(だ)・たり(だり)に續く時、發音の便宜上そ

の音が變化し、從つてその文字も書き改める。これを**音便**といふ。

一　イ音便　き・ぎがいに轉ずる場合

- 咲いて ← 咲き
  - 咲いた
  - 咲いたり
- 泳いで ← 泳ぎ
  - 泳いだ
  - 泳いだり

二　ウ音便　ひがうに轉ずる場合

- 買うて ← 買ひ
  - 買うた
  - 買うたり

三　撥音便　にび・みが撥音のんに轉ずる場合

- 死んで ← 死に
  - 死んだ
  - 死んだり
- 飛んで ← 飛び
  - 飛んだ
  - 飛んだり
- 怨んで ← 怨み
  - 怨んだ
  - 怨んだり

四　促音便　き・ち・ひ・りが促音のつに轉ずる場合

- 行つて ← 行き
  - 行つた
  - 行つたり
- 勝つて ← 勝ち
  - 勝つた
  - 勝つたり
- 買つて ← 買ひ
  - 買つた
  - 買つたり
- 賣つて ← 賣り
  - 賣つた
  - 賣つたり

右の中、て(で)に續く場合には文語・口語共に用ひ、た(だ)たり(だり)

に續く場合は口語にのみ用ひる。

形容詞の音便

一　イ音便　文語形容詞の連體形がいとなる場合

難き哉……難い哉。

美しき哉……美しい哉。

二　ウ音便　文語形容詞の連用形がうとなる場合

山高くして……山高うして。

若くして死す……若うして死す。

練　習

一、次の文中の音便を示し、且つ其の種類をいへ。

(1)　日はもう西に傾いてゐる。ふと見あげると、庭の柿の木には、すゞなりになつた實が夕日をあびて、珊瑚珠のやうにかゞやいてゐる。

(2)　あつと思はず人々が叫んだ。とたんにずどんと一發、さまじい大砲の音がとゞろき渡つた。

(3)　何とも知らぬ物音ざわ〳〵として夜の靜けさを破る。こはたゞ事ならじと、尾野路山の本營に急報すれば、盛政直に物見の兵を出してうかゞはしむるに、こは如何に降つてわいたる敵の大軍、木之本の邊に滿ち〳〵たりと報じ來る。

(4)　夢心地にあわてて乳首に吸附いて、一しきり吸立てるがすぐにたわいもなくうと〳〵となつて、乳首が口から脫ける。脫けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

(5)　旦に星を戴いて出で、夕に月を踏んで歸る。

(6)　助けたきは山々なれど、悲しいかな我が力及ばず。

(7)　山高うして水清く、松青うして砂白し。

(8) 首尾よう兄弟が仇祐經を討つたと聞いた時の母の心はどんなであつたらう。

(9) 東が次第に白んで來て、丁度そちらに向いてゐる硝子窓にほのかな色がさして來る。

(10) 年若うして笈を負ひ江戸に遊ぶ。

二、次の文の誤を正し、且つ其の理由をいへ。

(1) 此の道に沿ふて行けば海岸に出る。

(2) 風呂敷包を背負つた背中が汗ばんで來る。

(3) 穂が殘らず落ちてしまふと束をむしろの向ふにぽいと投げて、又新しい束を取る。

(4) 汽車の窓から吹きこむ朝風のひやりとするのは、餘程北へ進んだ爲だらう。

(5) 親を養うただけでは十分の孝とはいへぬ。其の上に敬といふことがなくてはならぬ。

(6) 天を仰ぐで嘆息した。

(7) 掌中の玉を失なたる心地して唯茫然たるのみ。

(8) 一見易さうに見えるが、中々むつかしゅうございます。

(9) 私はあなたが死んだ子供の身代りのやうに思へます。

(10) 味方の兵五十騎ばかり濱邊傳ひに飛んで來る姿が間近く見えた。

第七章　文語助動詞の種類及び活用

一　時の助動詞

(イ)　完了の助動詞　つ・ぬ・たり・り

花咲き……つ。
……ぬ。
……たり。

花咲け……り。

時の助動詞
完了

過去

未來

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	

(ロ) **過去の助動詞　き・けり**

花散り……き。

……けり。

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き			き	し	しか	
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	

(ハ) **未來の助動詞　む**

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む			む	む	め	

明日は雨晴れ…む。

未來の助動詞むは同時に推量の意をあらはし、又意志をあらはすに用ひる場合もある。

明日は彼も行かむ。（推量）

明日は我も行かむ。（意志）

むは文章中に於ては、んと書く場合が多い。

受身の助動詞

二　受身の助動詞　る・らる

犬、人に打た…る。

賊、捕へ…らる。

可能の助動詞

三　可能の助動詞　る・らる・べし・べかり

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	るゝ	るれ	れよ
らる	られ	られ	らる	らるゝ	らるれ	られよ

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
べかり	べから	べかり				

此の書は、我にも讀ま…る。
何人にも了解せ…らる。
険しくして、登る…べき…道なし。
危険にして、近づく…べから…ず。

使役の助動詞

四　使役の助動詞　す・さす・しむ

る・らるの活用は受身の場合と同じい。但、命令形がない。

下女に水を汲ま…す。
犬を子供に馴れ…さす。
賴朝、義經をして、義仲を攻め…しむ。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

崇敬の助動詞

五　崇敬の助動詞　る・らる・す・さす・しむ

父、東京に行か…る。

先生は、本日缺席せ…らる。
殿下、臨幸あら…せ…らる。
皇后陛下、日光に行啓せ…させ…給ふ。
天皇陛下には、親しく觀兵式に、臨ま…しめ…給ふ。

る・らるは受身、す・さす・しむは使役の場合と活用が同じい。
す・さす・しむは右の例のやうに、下にらる・給ふ等の添ふ場合が多い。
崇敬の意をあらはすには、右のやうな助動詞の外に、給ふ・おはす・おはします・ます・奉る・侍り・候といふやうな動詞が轉じて用ひられる場合がある。

六　推量の助動詞　らむ・らし・べし・けむ・めり・まし

雨降ら……まし。
雨降り……けむ。
雨降る……らむ。
……らし。
……べし。
……めり。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らむ			らむ	らむ	らめ	
らし	らしく	らしく	らし	らしき	らしけれ	
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	
けむ			けむ	けむ	けめ	
めり			めり	める	めれ	
まし			まし	まし	ましか	

けむは、過去の推量である。

べしは、可能・推量の意をあらはす外に、命令・義務の意をあらはすことがある。

汝速に行くべし。（命令）

軍人は上官に服従すべきなり。（義務）

らしは古くは、らし（終止）・らし（連體）・らし（已然）と活用してゐた。

七　打消の助動詞　ず・ざり・じ・まじ

打消の助動詞

風吹か…ず。
…ざりき。
…じ。

風吹く…まじ。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	
ざり	ざら	ざり		ざる	ざれ	ざれ
じ			じ	じ	じ	
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	

じ・まじは打消の推量である。

八　指定の助動詞　なり・たり

指定の助動詞

孔子は聖人…なり。

君、君…たり、臣、臣…たり。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

咏嘆の助動詞

九　咏嘆の助動詞　なり・けり

蟲の聲す…なり。

悲しきものは、我が身なり…けり。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり			なり	なる	なれ	
けり			けり	ける	けれ	

願望の助動詞

一〇　願望の助動詞　たし・まほし

飛行機に乘り…たし。

月見に行か…まほし。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ	
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ	

比況の助動詞

一一　比況の助動詞　如し

落花雪の…如し。

雷の落つる(が)…如し。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
如し	如く	如く	如し	如き		

右のやうに、助動詞には、(一)動詞に似た活用をなすもの、(二)形容詞に似た活用をなすもの、(三)獨特の活用をなすものがある。

練習

次の文中から助動詞を選び出し、且つ其の種類及び活用をいへ。

(1)　過ぎたるはなほ及ばざるが如し。

(2)　こはたゞ事ならじと本營に急報すれば、將軍直に物見の兵を出してうかゞ

はしむ。

(3) 千木のほとりを飛べる鳩の、さながら雀の如く見ゆるも、社殿の高大なる爲なるべし。

(4) 主上はや院庄に入らせ給ふ。

(5) なぎさに立ちて昔を偲べば、そのかみ此處にいかめしく向ひあひけむ英雄の姿、今まのあたり見るが如し。

(6) いづかたに志してか日盛りのやけたる道を蟻の行くらむ。

(7) 花は櫻木の諺自ら思ひ出でらる。

(8) 五十人の兵は行く〳〵百姓を募り、篝火をたかせ、糧食の用意をなさしむ。

(9) 主上隱岐にうつされ給ふと聞き、高德一族共を集めていへるやう、義を見てせざるは勇なきなり。いでや、行幸の路に待受け、君を奪ひ奉りて義軍を起さん。と。

(10) 孔子長じて後魯の君に仕へ、大いに治績を擧げしかども、奸臣の爲にさまたげられ、久しく其の職に居ること能はずして魯を去りぬ。

(11) さし昇る朝日の如くさわやかにもたまほしきは心なりけり。

(12) 彼は土地の事情を研究することを怠らざりき。

(13) 大まつりごとに暇もおはせざりつる一日を過させ給ひ、百官の退出せし後、心靜かに書見せさせ給ふ。

(14) 學生たる者いかでか其の本分を守らであるべき。

(15) 先生の墓所は畑道なれば知れ申すまじ。案内し參らせんとて導き行きけり。

第八章　口語助動詞の種類及び活用

一　時の助動詞

時の助動詞

過去

(イ)　過去の助動詞　た(だ)

朝早く起き…た。

未來

意志

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
た	たら	たり	た	た	たれ	

たはだとなることがある。

風が凪いだ。

高く飛んだ。

口語では過去と完了との區別がない。

(ロ)　**未來**の助動詞　**う·よう**

明日は雨が降ら…う。

明日は晴れ…よう。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
う			う			
よう			よう			

受身の助動詞

可能の助動詞

使役の助動詞

(ロ)　**受身の助動詞**　**れる·られる**

主人に叱ら…れる。

主人に譽め…られる。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られよ

(ハ)　**可能の助動詞**　**れる·られる**

誰でも行か…れる。

誰にでも覺え…られる。

活用は受身の場合と同じい。但、命令形はない。

四　**使役の助動詞**　**せる·させる**

生徒に字を書か…せる。

子供に悪戯をやめ…させる。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せよ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させよ

崇敬の助動詞

五　崇敬の助動詞　れる・られる・ます

兄上が種を蒔かれる。
父上が木を植ゑられる。
草取は私がし…ます。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ

れるられるの活用は、受身の場合と同じい。

推量の助動詞

右の外、せられる・させられる・あそばす・なさる・いたします・まうします等の合成語が用ひられる。これ等は便宜上一の助動詞として取扱つてよい。

六　推量の助動詞　らしい

彼は、もう知つてゐる…らしい。

活用／語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
らしい	らしく（らしう）	らしく	らしい	らしい		

打消の助動詞

右の外であらう、だらう等の合成語が用ひられる。

七　打消の助動詞　ぬ・ない・まい

私は知ら…ぬ。
…ない。

彼も知る…まい。

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ぬ		す	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね	
ない		なく	ない	ない	なけれ	
まい			まい			

指定の助動詞

八　指定の助動詞　だ・です。

彼は僕の親友…だ。

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
だ	だら	だう	だ			
です	でせ	でし	です			

だが活用語の下に添ふ時にはのだとなる。

私は勉強するのだ。

願望の助動詞

比況の助動詞

あの山は隨分高いのだ。

そんな事はないのだ。

右の外、であるといふ合成語が多く用ひられる。

九　願望の助動詞　たい

首尾よく及第し…たい。

活用語	未然	連用	終止	連體	已然	命令
たい	たく	たく(たう)	たい	たい	たけれ	

一〇　比況の助動詞　やうだ・やうである

落花が雪の…やうだ。

銀の砂を撒いた…やうである。

咏嘆の意は助詞わい・ねえ等を添へてあらはし、別に助動詞はない。

未然形　う・よう・れる・られる・ぬ・ない（まい）

連用形　た（だ）・ます・たい・（まい）

終止　まい　らしい

連体　やうである　やうです　やうだ

練習

次の文中から助動詞を選び出し、且つ其の種類をいへ。

(1) 老人は大分疲れたやうである。少年は鐵瓶の湯をついで老人にすゝめた。
(2) 世界一といはれるナイヤガラの瀧は、アメリカ合衆國とカナダとの國境にあります。
(3) 其の壯觀はとても筆や口には盡くされません。
(4) 腹が大分すいて來ました。もうお晝頃でせうね。
(5) 來客があるらしいから今は行くのをやめにしよう。
(6) 電氣は今やあらゆる方面に利用されてゐる。
(7) 先生にもほめられ、家でもほめられ、この上なく喜んだ。
(8) 是非拜見致したう御座いますが、何時お邪魔したらよいでせう。
(9) お庭も拜見したければ、お話も伺ひたい。
(10) これだけお待ちあそばせば、この上はおひきとりになつてもよろしう御座います。

時の助動詞

第九章　動詞と助動詞との接續

一　時の助動詞

つ……全動詞の連用形　　遂に逃れ果てつ。
ぬ……ナ變以外の連用形　　日は傾きぬ。
（ナ變にはつかず）
たり……全動詞の連用形　　傷を受けたり。
り……四段の已然形　　書を讀めり。
サ變の未然形　　登山せり。
き……全動詞の連用形　　昔、人ありき。
但、きがカ變サ變につく時は、左の如くなる。

	未然	連用
カ變	來(コ)し	來(キ)し
サ變	爲(ヒ)し	爲(シ)き
	しか	しか

終止形きはカ變にはつかず。

又、サ行四段にし・しかがつく時、「過しし時」「過ししかば」となるべきを「過せし時」「過せしかば」となる類は差支ない。

けり……全動詞の連用形　花散りけり。

む……全動詞の未然形　我も行かむ。

口語のうは四段、ようはその他の未然形につく。

二　受身(可能・崇敬)の助動詞

る……四段・ナ變・ラ變の未然形　父に叱らる。母に死なる。此處に居らる。

らる……右以外の未然形　犬に吠えらる。馬に蹴らる。逮捕せらる。

らるがサ變につく時、「罪せらる」「解釋せらる」となるべきを「罪さる」「解釋さる」となる類は差支ない。

口語のれるは四段、られるはその他の未然形につく。但、サ變につく時、「欠席せられる」となるべきを「欠席される」となる類は差支ない。

三　可能の助動詞

べし……ラ變の連體形　かゝる事もあるべし。

右以外の終止形　女も登るべし。

べからず……同前　汝は居るべからず。

べかり……同前　我も參加すべかりしに。

使役(崇敬)の助動詞

四　使役(崇敬)の助動詞

す……四段・ナ變・ラ變の未然形　舟を漕がす。彼を死なす。君側に侍らす。

さす……右以外の未然形　弓を射さす。木を植ゑさす。

さすがサ變につく時、「手習せさす」「賣買せさす」となるべきを「手習さす」「賣買さす」となる類は差支ない。

しむ……全動詞の未然形　競爭せしむ。

「得しむ」といふべきを「得せしむ」といふことは差支ない。

口語のせるは四段、させるはその他の未然形につく。但、サ變につく時、「掃除せさせる」とやうになるべきを「掃除させる」とやうになる

崇敬の助動詞

推量の助動詞

のが普通である。

五　崇敬の助動詞

受身・使役の條參照

六　推量の助動詞

らむ……ラ變の連體形　何れの處にて侍らむ。物思ふらむ。

右以外の終止形　家有るらし。紅葉散るらし。

らし……同前　かくこそ侍るめれ。雨降るめり。

めり……同前　いづち行きけむ。春の心は長閑けからまし。

打消の助動詞

けむ……全動詞の連用形

まし……全動詞の未然形

七　打消の助動詞

ず……全動詞の未然形　未だ消えず。

ざり……同前　全く知らざりき。

じ……同前　未だ散らじ。

まじ……ラ變の連體形　かゝる事は有るまじ。

右以外の終止形　遽には來まじ。

八　指定の助動詞

指定の助動詞

なり……全動詞の連體形　月出づるなり。

たり……體言にのみつく。

九　咏嘆の助動詞

咏嘆の助動詞

なり……ラ變の連體形　かくこそ今は侍るなれ。

右以外の終止形　蟲の聲すなり。

けり……全動詞の連體形　道はありけり。

願望の助動詞

一〇　願望の助動詞

たし……全動詞の連用形　運動會を見たし。

まほし……全動詞の未然形　早く知らまほし。

比況の助動詞

一一　比況の助動詞

如し……全動詞の連體形　水の流るゝ(が)如し。

如しは活用語につく時は、多く助詞がを挾む。

第一〇章　助動詞相互の接續

助動詞相互の接續は、大體動詞と助動詞との接續に準じて知ることが出來る。即ち、動詞の未然形につく助動詞は、助動詞にも未然形につき、その他、連用形・終止形・連體形等につく場合も同樣

である。

師を擇びて、學ばしめらるべし。

又、べし・べかり・らむ・らし・めり・まじ・なり（咏嘆）等のやうに、動詞のラ變に限り連體形につき、その他には終止形につくものは、ラ變に似た活用の助動詞にはやはり連體形につき、その他の助動詞には終止形につく。

明日は晴天なるべし。

かゝる事もありぬべし。

大いに努力せざるべからず。

子供には飲ましむべからず。

練習

一、助動詞を動詞の未然形・連用形・終止形・連體形・已然形につくものに分類して表をつくれ。

二、次の文中から助動詞を選び出し、且つ其の種類及び接續について述べよ。

(1) 勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが、常に良書の得難きを歎ぜり。偶〻一書肆をすぎ新刊の一書を見、之を購はんと思ひて、其の價を問へば五十兩と答ふ。當時書生の身分なれば、五十兩の金は直に得らるべくもあらず。後之を調へ、勇んで書肆に至れば、かの書は既に他に賣られて無かりき。

(2) 注意は知識を生じ、やがては其の人を趣味豊かなる人となして、すべての事物につきて興多からしむるものなり。學淺くとも其の注意だに深くば、旅はなか〳〵興多くして、しかも少なからぬ利益を得んこと疑あるべからず。

(3) 花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を觀る客清水觀音の堂前に滿ちたり。舞臺の上より見下す人、舞臺の下より咲誇る花、恰も一幅の畫の如し。

(4) 生きて一鄕の爲に功ある者は、死して一鄕の爲に惜しまれ、一郡の爲に盡くせる者は一郡の爲に哀しまる。

三、次の文の誤を正し、且つ其の理由をいへ。

(1) 風烈しければ庭の若木や倒るゝらむ。
(2) 此の品物に手を觸るゝべからず。
(3) 不都合の行爲あらさすなかれ。
(4) 一切の事皆彼に任さす。
(5) 枯れたる木に花を咲かしたりといふ話あり。
(6) 我をして安らかに世を過ぎさしむ。
(7) かゝる行は學生のせまじきことなり。
(8) 重要なる事件は決して人に任さまじ。
(9) 彼方の山の朧なるは霞の之を隔つなり。
(10) 急を聞き走り家に歸れるに早やこときれり。
(11) 奮鬪しし甲斐ありて見事成功したりき。
(12) 汽車に注意するべし。
(13) 其の說異なれりといへども、其の誠に至りては同じ。
(14) 彼は全力を盡せしかども目的を達すること能はざりし。
(15) 言々句々肺腑より出で、溢る如き熱誠にみちたるものなりき。
(16) 遠き道をも厭はずしてかゝる田舍に來き。
(17) 雷にうたれて死にぬ。
(18) 路傍死にぬる人あるを見たり。
(19) 彼方に人々多く集まる如かれば何事ならんと急ぎ見に行きぬ。
(20) 一年のほどに我が宿は見る影もなく荒れ果てり。

四、次の文の誤を正し、且つ其の理由をいへ。

(1) そんなことは恐らく言うまい。
(2) 君も行き給へ、僕も行こう。

ば

(3) とてもだめだらうが、もう一度やつてみやう。
(4) 手放し難い用事があろから誰かに立案ささう。
(5) そんな亂暴なことはするまいと思ふがどうだろう
(6) 眞劍でない生活には何の價値があろふか。
(7) 僕だつてあれが射れないことはなからう。
(8) 双眼鏡さへあれば向ふの人だつて見れるよ。
(9) 二度も三度も言はしたのだが、それでもだめだ。
(10) 光陰は矢のようだ。

第一一章　助詞の用法附係結の法則

一　ば

(イ) 假定の意をあらはす場合　活用語の未然形に添ふ。

明日雨降らば、遠足は中止すべし。

水清くば、大魚棲まじ。

父上も賛成ならば、汝も行くべし。

(ロ) 既定の意をあらはす場合　活用語の未然形に添ふ。

今日雨降れば、遠足は中止す。

水清ければ、大魚棲まず。

父上も賛成なれば、汝も行くべし。

口語では、已然形にばを添へて假定の意をあらはし、既定の意をあらはすには、多く終止形にので・から・とを添へたものを用ふる。

明日雨が降れば、遠足は中止しよう。

今日は雨が降るから、遠足は中止する。

二　とも

動詞(動詞に似た活用をなす助動詞)の終止形、形容詞、(形容詞

に似た活用をなす助動詞の未然形に添うて假定の意をあらはす。

人笑ふとも、意に介せじ。

如何に非難せらるとも、頓着せじ。

悲しくとも、泣くな。

行きたくとも、辛棒せよ。

但、連體形に添ふ習慣あるものは、それに從つても差支ない。

數百年を經るとも、……

如何に批評せらるとも、……

强ひて之を遵奉せしむるとも、……

口語では、でも(でも)を用ひ、活用語の連用形に添ふ。

今更泣い泣きの音便)ても、駄目だ。

悲しくうても、泣くな。

藥を飲ん(飲みの音便)でも、癒らぬ。

三　ど・ども

活用語の已然形に添うて、既定の意をあらはす。

人笑へども(ど)、意に介せず。

悲しけれども(ど)、泣かず。

數回讀みたれども(ど)、理解せられず。

口語ではけれども を用ひ、終止形に添ふ。

人が笑ふけれども、意に介しない。

悲しいけれども、泣かない。

數回讀んだけれども、理解せられない。

假定又は既定の意をあらはす場合、誤解を生じない限り、ども・どもの代りにもを用ひても差支ない。

な

何等の事由あるも（ありとも）、議場に入ることを許さず。
期限は今日に迫りたるも（たれども）、準備は未だ成らず

四　な

ラ變の動詞の連體形、その他の動詞の終止形に添うて、禁止の意をあらはす。

學校を休むな。
男らしからぬ事をするな。
かゝる場所に居るな。

な……そ

五　な……そ

なは上につき、そが、カ變サ變の動詞の未然形、その他の動詞の連用形に添うて、禁止の意をあらはす。

かくな宣ひそ。　な來そ。　な爲そ。

と

六　と

（イ）並列の意をあらはす場合　體言に添ふ外、活用語には、その連體形に添ふ。

これ德あると德なきとによるなり。

並列のとは上の語句の一々に皆添へるべきであるが、紛れぬ場合に限り最終のとを省いても差支ない。

宗教と道德の關係を論ず。

省いてならぬ場合

甲と乙の兄が來た。（甲と乙との兄が來た。）
（甲と乙の兄とが來た。）

（ロ）上文を指示する場合　活用語の終止形に添ふ。

朝日昇ると思ふ間もなく……

運命も盡きぬと見えたり。

但、連體形に添ふ習慣あるものはそれに從つても差支ない。

月出づると見えて、……

嘲弄せらるゝと思ひて、……

七　だに・すら・さへ

だに・すら・さへ

禽獸にだに若かず。

生死すら明かならず。

道險しく、雨さへ降る。

右の例のやうに、だに・すらは、最も意味の輕いものを表面にあらはして、意味の重いものを言外に含ませ、さへは、既にある上に更に加はる意をあらはす。

口語では右の區別はなく、さへが一般に用ひられる。

禽獸にさへ及ばない。

生死さへ明かでない。

八　ばや・なむ

ばや・なむ

共に動詞・助動詞の未然形に添ひ、願望の意をあらはす。

我も行かばや。

世の汚をば、知らであらなむ。

母に知らせばや。

注意　「世の汚をば知らでありなむ。」のやうに連用形に添ふなむは、完了の助動詞ぬの未然形に未來の助動詞むの添うたもので、助詞のなむとは異なる。

九　や・か

や・か

(イ)　疑の意をあらはす場合　活用語に添ふ時、やは終止形に、か

は連體形に添ふべきである。

果してその人なりや。

果してその人なるか。

但、今はやも連體形に添ふことが多い。

父に似たるや、母に似たるや。

(ロ) 上に疑問の語の來る場合　下にかを用ふべきである。

五と三との和は幾何なるか。

これを如何にすべきか。

但、今はかゝる場合にもやを用ひても差支ない。

幾何なるや。

如何にすべきや。

(ハ) 反語の意をあらはす場合。

豈我のみならんや。

誰かは感激せざらん。

係結の法則

ぞ・なん・や・か

こそ

係結の法則

一　ぞ・なん(強めの助詞)**や・か**(疑問・反語の助詞)が文の途中に來る時は、それに應ずる結びは連體形となる。

彼ぞ其の人なる。

彼なん知れる。

花や散りし。

誰か之を知らざるものある。

二　こそ(強めの助詞)が文の途中に來る時は、それに應ずる結びは已然形となる。

富士山こそ日本一の高山なれ。

轉結

祝ふ今日こそ樂しけれ。

但、その文が接續の助詞によつて下に續けられる場合は、係結の法則は消えて、その助詞の接續の法則に從ふ。

あはれ知る人とぞ聞ゆれば……

時鳥一聲とこそ思ひしに、……

練習

一、次の文中から助詞を選び出せ。

(1) 淺綠すみわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな。

(2) 君に知らせ奉らばや。

(3) 繪にかくとも筆も及ぶまじ。

(4) 汽車に乘りては風さへ加はりて、窓を開くこともならねば、法隆寺などいふ聲を空しく聞くのみ。

(5) 雨降らずば飛下りても行きたしと思ひぬ。

(6) 逃ぐるにやあらん、はたこなたへと道しるべするにやあらん。

(7) 口惜しきこと多けれどえ盡さず。

(8) 明日もありとは賴むべき身かは。

(9) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。

(10) 此事を人にゆめ〳〵知らせ給ひそ。

二、次の文の係結について述べよ。

(1) 君をおきてはた誰をか賴むべき。

(2) 楓はすべて夏面白きを、秋のものとのみ愛でしこそいぶかしけれ。

(3) 苔むしたる石燈籠の下に鹿の伏したると起きたると二つ並びゐるこそ面白き眺なれ。

(4) 綠なる一つ草とぞ春は見し、秋はいろ〳〵の花にぞありける。

(5) 昇平の今に至るまで洗ひ清めんとする者の少なきこそ心得ね。

(6) 世の中は何か常なる飛鳥川昨日の淵ぞ今日の瀬となる。
(7) 富士の山なん古より名を得たる。
(8) 外より來れる者などぞ「殿はいかにならせ給へる」など問ふ。
(9) ほど〳〵に心を盡くす國民の力ぞやがてわが力なる。
(10) 重なる岩根を踏みしめて生ひ立つ松、其の間を點綴して咲きにほふ花、嵐山の春こそ今たけなはなれ。

三、次の文の誤を正し、且つ其の理由をいへ。

(1) よし落第すれども決して落膽すべからず。
(2) 明日は天氣惡しとも出發せん。
(3) 御都合惡しければ御來車下さるに及ぶまじく候。
(4) 世に怪物といふものなし。如何に暗くあれども恐るゝな。
(5) 鳥の啼かぬ日はあるとも親を思はぬ日はあらじ。
(6) 朝に道を聞けば夕に死するも可なり。

(7) 色はよしとも毒を含める花あり。
(8) 人遠き慮なくば近き憂あり。
(9) 君は何時に起床するや。
(10) 益なきことをな爲そ。
(11) 何故にやありけん遂に物もいはで去りぬ。
(12) たとひ敏捷なれども機を失することあるべし。
(13) 見物の人一時に集まり、立錐の餘地さへなし。
(14) 思ひもかけぬに東京の友ぞ來れり。
(15) 花の中にて櫻こそめでたきものなる。
(16) 彼こそ級中第一等の人物なりし。
(17) 世の中ぞ常なきものなれ。
(18) 我こそ武藏坊辨慶なり。
(19) そなたの金をそなたに取納め給ふに何の禮いふことかあるべし。

(20)　人は友を擇ぶが肝要なれ。

第一二章　接頭語・接尾語

接頭語

単獨には用をなさないで、他の語の上について熟語をなす語を接頭語といふ。

うひ陣　お庭　す足　ひが目　ま心　を田
た走る　ほの見ゆ　いや増す　さ迷ふ　か弱し
け高し　生やさし　物寂し　た易し

又

うち出づ　さし出す　ひき受く

右のうち・さし・ひき等は本來動詞であるが、その本の意を失つて接頭語となつたものである。

接尾語

単獨には用をなさないで、他の語の下について熟語をなす語を接尾語といふ。

子ども　彼ら　君たち　奴ばら　君がた
長さ　嬉しさ　厚み　重げ　春めく　黄ばむ
嬉しがる　上品ぶる　露けし　男らし　馬鹿らし
夜すがら　花見がてら　少しづつ

文章篇

第一章　文の成分

主語・述語

一　犬　走る。
二　山　高し。
三　正成は　忠臣なり。
四　彼も　行きたり。

右の文に於て、犬・山・正成・彼は其の文の主體をなす語であるから、これを**主語**といひ、走る・高し・忠臣なり・行きたりは主語についてその動作・狀態・性質等を敍述する語であるから、これを**述語**といふ。

主語
述語

主語は普通體言から成り、單獨にあらはれる場合と助詞は・も・が等をともなふ場合とある。

但、時としては左例の如く體言に準ずべき語から成ることもある。

一　海上平穩なるは、何よりの幸なり。
二　速にするのみが、尊きにあらず。

述語は普通用言又は用言に助動詞・助詞の添うたものから成る。

但、時としては、左例の如く體言又は體言に準ずべき語に助動詞の添うたものから成ることもある。

一　東京は　日本の首府なり。
二　歳月　流るゝが如し。

主語・述語は文の主成分であつて、普通これが備はらねば完全な

文とはいへない。

客語

一　猫　鼠を　捕ふ。

二　父　東京に　行かる。

三　頼朝　幕府を　鎌倉に　開く。

四　明治天皇　江戸城を　皇居と　定め給ふ。

右の例に於て、傍線を施した語は各、其の述語の目的をあらはし、又は述語の意味を助けて其の働きを完全にする。かゝる語を客語といふ。

客語は體言又は體言に準ずべき語から成り、必ず助詞を・に・と等を伴なふ。

客語は、述語の性質によつて必ず無ければならぬ場合と然らざる場合とある。

修飾語

一　美しき鳥　ほがらかに　啼く。

二　壯大なる居城を　交通便利なる大阪に　築く。

三　山のやうな波が　切立つた岩壁に　勇ましく　碎ける。

右の例に於て、傍線を施した語は、各、主語・述語又は客語を修飾してゐる語である。かゝる語を修飾語といふ。

主語・客語の修飾語は直接其の上につくが、述語の修飾語は他語を隔てて修飾する場合がある。

一　彼は　深更まで　文を書き續く。

二　突然　濃霧が一行を包んだ。

三　全く　私は殘念に思ひます。

右の様な場合は、修飾語は其の下全部を修飾してゐるものとするが適當である。

獨立語

一　花子や、お前もお出で。

二　あはや、子供等は諸共に河に落入らんとす。

三　太郎は書を讀み、且つ　字を書く。

右の例に於て、傍線を施した語は、主語・述語・客語又は修飾語の何れにも屬せぬものである。かゝる語を獨立語といふ。

練習

一　次の文の主語・述語・客語・修飾語・獨立語を選び出し、且つ修飾語はどの語を修飾するかをいへ。

獨主語

(1) 微雨はら〳〵と降りてやみぬ。
(2) 熾りなる火は濡れたる物を忽に乾かす。
(3) 我が園の梅の花雪の中にいち早く咲出でぬ。
(4) 朝日が部屋一面にはいつてゐる。
(5) 水鶏の啼く聲はいかにも遠くで何かを叩いてゐるやうに聞える。
(6) あゝ、面白かつた。おや、北斗七星が半分杉林にかくれた。
(7) 鳩は餘程遠い處で放しても、正しく方向を判定して、矢のやうに自分の巣に飛歸る。
(8) 文天祥は眞の男子なり。
(6) 生徒は蜘蛛の子を散らしたやうに八方へ散つた。
(10) 正一よ、お前も大分役に立つやうになつたなあ。
(11) 眞淵は宣長の學識の尋常でないことを悟つて、非常にたのもしく思つた。
(12) 高橋さんの熱心な話は團員に強い感動を與へた。

(13) たまに散る落葉の音が、がさり〳〵と聞える。
(14) 國旗は實に國家を代表する標識なり。
(15) 老僧の根氣は村の人々を恥ぢさせた。
(16) 釋迦は衆星の中の滿月の如く國中から仰がれる身となつた。
(17) 僕等は皆樺色のユニホームを着てゐた。
(18) おゝ、君だつたのか。
(19) 伯母は色の眞白な小猫を飼つてゐる。
(20) 彼は壁にかゝつてゐる鏡に向つてゐた。

第二章　文の成分の位置及び省略

一　正常の場合

正常の場合

一　美しき花　はらはらと散る。

二　偉大なる飛行船は　廣漠たる平野の空を　悠々と飛ぶ。

三　父は　遂に　すべての財産を　その子に　讓つた。

右の例で明かなやうに、文の成分の正常な位置は次の通りである。

一　(修飾語)主語　……(修飾語)述語。

二　(修飾語)主語　……(修飾語)客語　……(修飾語)述語。

但、述語の修飾語は時に客語又は主語の上に來て、其の下全體を修飾すること、前章に於て說いた如くである。

二　倒置の場合

倒置の場合

一　善いかな　言や。

二　かゝる善言を　誰か信ぜざらん。

三　私の机の上に　ペンが　ある筈だ。
四　ありませんね　そんな物は。

右は語調を整へ、又は語勢を強める爲に文の成分の位置を變へたものである。

三　省略の場合

省略の場合

(イ)　主語の省略

一　(人々)　此の處に塵芥棄つべからず。
二　(私は)　明日お訪ねします。

(ロ)　述語の省略

一　千里の道も一歩より。(始まる)
二　あなたは、どちらへ。(いらつしやいますか)

(ハ)　客語の省略

一　神よ、願はくは(我を)助け給へ。
二　皆が其の本を買ひましたから、私も(その本を)買ひました。

(ニ)　其の他一部分の省略

一　樂は苦の種。(なり)苦は樂の種。(なり)
二　彼は酒(を)も煙草(を)も飲まない。
三　私はそんな事(を)は知りません。

右の例のやうに文は冗長を避け、又は意味を強める爲に、其の成分を省略することがある。

練　習

次の文中省略されたものは補ひ、倒置されたものは正しい位置におけ。

(1) よき日は明けぬ、さわやかに。
(2) 我ははげまん、今日の業を。
(3) 顏を洗つて來てビスケットを食べた。
(4) 今日は日本晴のよい天氣。
(5) 賴むぞ、しつかり。
(6) 何を君は見てゐるのです。
(7) 走る〳〵、火消しが。
(8) 着物を着ろ、風を引くから。
(9) 昨夜は恐ろしい夢を見ました。
(10) 鶯の宿はと問はゞいかゞこたへん。
(11) 僕は出發するよ。君は。
(12) 三人は「どうかもう一曲」としきりに賴んだ。
(13) 木村君は文法の書物をわすれて來たので、僕のを見せてやつた。

第三章　文の種類

單文

一　鳥　啼く。
二　巡査　賊を　追ふ。
三　商業は　之に從事する商人だけを利する爲のもので　はない。

右の例のやうに、主語と述語との關係が一通りであつて、一文の中に他の文が含まれることのないものを單文といふ。

一　正成と義貞とは　建武中興の功臣なり。
二　私は　鉛筆とペンとノートとを　買つた。
三　少女は　且つ笑ひ且つ泣く。

四　私は　行はうと思つたことを行ひ盡し　語らうと思つたことを語り盡した。

右の例のやうに、主語・述語・客語が幾つも重つたり、又は客語に述語の添うたものが幾つも重なることがあるが、主語と述語との關係は同種類のものであつて、別種のものではない。これもやはり單文である。

複文

一　空氣の濁れるは　呼吸器に　害あり。

二　月明き夜は　散歩に　よし。

三　日本海は　波高し。

四　鮎は　瀨の早きを　喜ぶ。

五　歲月は　水の流るゝが如く　過去る。

句

複文

文主

六　天氣清朗なれども　波高し。

右の例のやうに、一の文が他の文に從屬して其の成分となることがある。かやうに他の文に從屬してゐる文を**句**といふ。

句には、右の例で明かなやうに、主語となるもの、述語となるもの、客語となるもの、修飾語となるものがある。

そして句を含む文(卽ち一文の中に主語・述語の別種の關係が二回以上成立つ)を複文といふ。

右の例の(三)のやうに句が述語となつてゐる場合、日本海はといふ全文の主語は特に**文主**といふ。

重文

一　月明に、星稀なり。

太郎は　性機敏なり。

二　兄は庭を掃き、弟は水を汲む。

三　風雨烈しく、道は暗く、提灯も消えたり。

右の例のやうに、二つ以上の文が一文中に含まれ、然も其の各〻は從屬關係をなすことなく、對立の關係にある時、其の各〻を**節**といふ。

そして節の相寄つて成る文を重文といふ。

節

重文

練習

次の文の種類をいひ、其の構造を説明せよ。

(1) 涼しい風がそよ〳〵と吹いて來る。

(2) 春は島山かすみに包まれて眠るが如く、夏は山海皆綠にして目覺むるばかり鮮かなり。

(3) 生物の聲全く絶えてただ我が砂を踏む足音のみ高く響く。

(4) 蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。

(5) 昨夜の風雨は名殘なくをさまつたが、海面にはまだ波のうねりが高い。

(6) わが始めてかの人を知りし時、彼の人は京都に居たりき。

(7) 雨が降ると地が固まる。

(8) 兄は先生で弟は政治家である。

(9) 汽船が沈沒して乘組員は多數溺死した。

(10) 爛漫と咲亂れた櫻花の、山を埋め、谷に滿ち、雲とまがひ、雪とまがふ景色は日本特有の美である。

(11) 大小さま〳〵の馬が元氣よくかけまわつてゐる樣は實に勇ましい。

(12) 霜は色うるはしく木々の梢を染出せり。

(13) 月影のさゞなみにくだけ、漁火の波間に出沒する夜景も亦一段の趣あり。

(14) いつか夕方の色が四方にたゞよつて、向ふの山も薄墨色にくれてゆく。

(15) 山の裾の方があちらこちら白いのは蕎麥の花であらう。

新編國文典 終

附錄　文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亘リテ鎭火セザリシ

金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「ヽヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス

周旋サス

賣買サス

六、「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル
　　評サル
　　解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
　　上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
　　攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記
　　學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
　　市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

一〇、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ
　　面白キヤ
　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

一一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ
　　如何ニ批評セラルルトモ
　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

一二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ

嘲弄セラルヽト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

一三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書㋩ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳㋩ヲ讀ムベシ

一四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

一五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニオイテ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(スレドモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(タトモ)(クレドモ)應募者ハ多カルベシ

一六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

昭和五年十月十日
文部省檢定濟
師範學校並中學校國語科用

昭和四年十月十五日印刷
昭和四年十月二十日發行
昭和五年十月五日訂正再版印刷
昭和五年十月八日訂正再版發行

【新編國文典】

定價金參拾八錢
昭和六年度臨時定價金六拾錢

著作權所有
著者檢印

著作者　廣島高等師範學校附屬中學校　國語漢文研究會

發行兼印刷者　大阪市西區立賣堀南通三丁目二十一番地　京極喜太郎

發行所　東京市小石川區宮下町五十三番地　大阪市西區立賣堀南通三丁目四五番　振替口座大阪八六〇四番　京極書店

發賣所　大阪市東區北久太郎町四丁目　振替口座大阪二二三一番　柳原書店

發賣所　東京市日本橋區數寄屋町七番地　林六合館

三十五

広島大学図書
2000030335